帝京科学大学紀要 Vol.12（2016）pp.91-98

マリー・ホール・エッツの絵本における戦争の影について

神戸洋子

帝京科学大学

Shadow of coming war in Marie Hall Etz's picture books

Youko KANBE

Teikyo University of Science

Though picture books of Etz（1895-1985）have been considered warm and tender, they contain senses of anxieties and grief. Etz's anxieties and grief are related to wars.A boy and animals in *In the Forest*（1944）are marching like an army, and he and his father vanish into the forest as if they are gone.

The hollow tree has an ear to spy them. A seal in *Oley, the Sea monster*（1947）is like a conscript boy, being totally at a loss in an alienated place. The car in *Little Old Automobile*（1948）may be a fugitive soldier. He goes his own way and gets forfeited of girl and barbed-wire fences. Those grief against wars can be related to Etz' loss experience of her first husband during the war.

Keywords：米国古典絵本、マリー・ホール・エッツ、不安、悲しみ、戦争
（Keywords：classics picture-books　anxieties　grief　war）

はじめに

1940-1950 年代は米国の絵本の黄金時代とされている。移民として米国絵本の幕開けを飾ったワンダ・ガアグ Wanda Gag（1893 ～ 1946）を端緒として、それに続く米国生まれの作家バージニア・リー・バートン Virginia Lee Burton（1909 ～ 1968）、ロバート・マックロスキー Robert McCloskey（1914 ～ 2003）、そしてマリー・ホール・エッツ Marie Hall Ets（1895 ～ 1984）、などがその旗手である。

子どもと小動物の交流などを表現したマリー・ホール・エッツの作品は、暖かく、柔らかな色彩と線を持ち、子どもに向ける暖かなまなざしが読み手の心情に訴えるので、特に日本では人気のある絵本として長く読みつがれてきた。エッツ作品の評価は、その暖かさや柔らかさといった、喜びの体験が強調されてきた。

しかし、エッツの作品にはエッツの生きた時代を反映し、不安、悲しみに隣接する危うさが見え隠れしているのであるが、こうした側面からの言及はなされてこなかった。本稿では、エッツの作品を戦争や喪失感の影響を反映しているものとして捉えなおそうという試論である。改めて、マリー・ホール・エッツの生きた時代と絵本のかかわりを、戦争の影、そして喪失感や悲しみを超えて描かれる視点から、エッツの絵本を概観するものである。

1．戦争の影

マリー・ホール・エッツは 1895 年、ウィスコンシン州、ミルウォーキー郊外の North Greenfield に生まれた。父は医者で後に牧師となる。自然に恵まれ、野原、牧場、森などが身近にある環境で育ち、幼い頃から絵を描くことが好きであった。

マリーの生まれた年は、キューバ独立運動が起こった年である。10 歳のときに、ロシア第一次革命、15 歳のときは、メキシコ革命と、世界は少しずつ戦争に向かって動きを始めており、19 歳の 1914 年オーストリア＝ハンガリー帝国のサラエボ事件を機に第一次世界大戦に突入する。20 歳の 1915 年にはチェコスロバキアが独立宣言を行ない、エッツ 22 歳の 1917 年には米国もドイツに戦線布告して、第一次世界大戦に参戦する。

同 1917 年、マリーは、大学を中退し、絵の仕事に就くとともに Milton Rodig と結婚する。しかし結婚直後に夫は徴兵され、式からわずか 2 週間後に亡くなる。失意のエッツは、それを乗り越えて社会福祉を学び、子どものための社会福祉活動に生涯を捧げるつもりでシカゴのセツルメント The Chicago Commons Social Settlement House でソーシャルワーカーとして働く。1926 年 31 歳で、赤十字外国部員としてチェコ、ピルゼンの小児診療所に勤務するが、赴任先のチェコで予防注射の接種ミスという医療事故に遭い病身となり、社会福祉活動を続けら

れないこととなって帰国した。1932年、37歳の時にセツルメントで知り合ったエッツ博士（Ets）と再婚し、デビュー作『ペニーさん』*Mister Penny*（1935）を発表する。

『ペニーさん』は家族（家畜）を養うために、毎日工場に働きに行くペニーさんを描いた作品である。家畜はお隣の畑を荒らし、それに激怒したお金持ちの隣人からの損害賠償要求など、家族が引き裂かれないための試練がペニーさんに次々と襲いかかる。昔話にプロットを借りた形式のお話で、最初は助けてくれているのは妖精か何かかと思うペニーさんであるが、実は怠けものとみえた家畜たちが心を入れ替え、ペニーさんを助けていたとわかるという、自然に寄り添う暮らし賛歌を謳った絵本である。この絵本によりエッツは“生まれながらのストーリーテラー”と称された。煙を吐く工場は、いつもペニーさんの自然に囲まれて暮らしたいと思う願いを拒むかのように、背景に何度も描き込まれる。

2作目は、夫エッツ博士の勤務先の病院での膨大なスケッチから生まれた生命誕生の神秘を描く絵本『赤ちゃんのはなし』*The Story of a Baby*（1939）である。これは胎児の成長を、生命のはじまりから、日を追って伝えたものである。エッツのスケッチは、小さな生命をいとおしむような暖かい筆致で赤ちゃんを捉え、赤ちゃんが笑った瞬間を、絵本のラストに持ってくる。赤ちゃんの方からの働きかけで、喜びを家族に届ける存在として赤ちゃんを一つの人格として描くことに成功している絵本である。

これら、初期作品は、明るい内容と表現が多く、寂しさは感じ取れない。

『赤ちゃんのはなし』刊行から4年、夫の闘病、ウィスコンシンの森に近い家で介護生活をしていたが死別する等の苦悩を超えてエッツは絵本を出版していく。

2. 『もりのなか』『海のおばけオーリー』『ちいさなふるいじどうしゃ』『またもりへ』に見える戦争

エッツ博士を送った翌年に出版された『もりのなか』*In the Forest*（1944）は、男の子が森でであった動物達と楽しく遊び、さいごにかくれんぼをしているとお父さんが迎えにきてくれるという、「ファンタジーの典型ともいわれている作品」（松居直、1973）であるが、その楽しい子どもの遊びを描いたはずの絵本には寂しさが潜むようになる。最後のページを描かずに、おとうさんが男の子を肩車して帰るページで終えても話は成立するのに、あえて寂しい誰もいない森のページを追加して描いたことで、最愛の人を失った悲しみが表現される。

『もりのなか』の主人公の行進の様子は伝説「ハメルンの笛吹き」を絵本にしたケイト・グリーナウェイの作品『ハメルンの笛吹き』*The pied Piper of Hamelin*、1903に似せている。

図1. ロバート・ブラウニング　ケイト・グリーナウェイ：ハメルンの笛ふき, 矢川澄子訳, 文化出版局, 1976

図2. マリー・ホール・エッツ：もりのなか. まさきるりこ訳, 福音館書店, 1963

男の子は紙の帽子とラッパという「ハメルンの笛吹き」のお話に登場する笛吹きさながらの異界へ出立する装備は「男の子の冒険」（灰島かり 2005）と評されるように、男の子は森という囲われた異世界へ入って行く。動物を従えて行進する男の子と動物たちがひとつのテーブルを囲む姿を矢野智司は「平和で調和的な時間の象徴的な意味をもつ・・・エデンの園の再現」[1] であると表現する。

「エデンの園」での食事風景へ向かう行進は兵士の進軍とも見えてこないであろうか。ハメルンの笛吹きが子ども達を連れ去ったように、戦争はエッツの最初の夫を含めた若い戦士たちを連れ去ってしまったのであった。

連れ去られた兵士たちが囲む森の中の食事風景は、矢野がいみじくも「エデンの園」と称したように異世界のものである。行進についてきて一緒に食

卓を囲む動物たちであるが、ウサギ以外は、米国にはいるはずのない動物ばかりである。これは、かくれんぼしたときに、最後まで一緒にいたうさぎ以外の動物は空想の産物とも、異界の存在とも捉えられるということである。

かくれんぼをしてそのまま、絵本から姿を消してしまう動物たちである。お父さんが迎えに来る前に、空想世界の動物だけでなく、ウィスコンシンの森にもいたであろう、うさぎも姿を消す。もの言わぬ動物、うさぎに仮託したのは、亡きエッツ博士の姿であろう、社会福祉活動に参加することが叶わなくなったエッツ自身の姿であろうか。

迎えにきたお父さんと男の子も、読者の側に向かって帰ってくるのではなく、読者に背を向けて、寂しい森の中に姿を消す。木のうろは、父と子の会話にまるでスパイでもするかのように聞き耳を立てている。耳の形のうろは、木の精霊が父子の会話に耳をそばだてているような構図なのであるが、私はあなた方の哀しみを知っていますよ、という肯定的な聞き耳と捉えることも出来る。動物は本当に「またこんどまでまっててくれる」のであろうか。その答えを出すかのように、『もりのなか』の続編として『またもりへ』*Another Day*（1953）が出版される。『もりのなか』から9年の歳月が流れているのだが、この間には、第2次世界大戦は終結したものの、1950年、朝鮮戦争が勃発している。

このような、中にあって、米国がいかに子どもたちに未来を見据えた絵本を手渡したいとしていたことか。

『またもりへ』は、動物達と技比べをする男の子が大笑いすると、動物達は「これはいい、ほかの動物たちは笑うことはできない!」と男の子に花の冠をかぶせて行進をするという話であるが、これもきなくさい時代を背景に、凱旋行列という戦争の勝利を祝う時の人々の歓喜にも見える。

『またもりへ』には、男の子を迎えにきたお父さんの「おとうさんだって、ほかになにもできなくてもいいから、おまえのように笑ってみたいよ」という言葉が挿入されている。松居はこのように、本来の地の文に大人がコメントを差し挟む絵本は、完成されたものとは考えにくいとして「ついに自分の手から作品として完全に独立させられなかったというような気配があるが･･･あえてこのように書かずにいられない作家の熱い思いがあったのだ」[2)] と述べる。作者としては、この最後のところをどうしても切り捨てることは出来なかったとするのである。

しかし、読み手である大人は、お父さんの発言「ほかになにもできなくてもいいから、おまえのように笑ってみたいよ」という言葉にこだわることもあろうが、聞き手である子どもたちは、人間だけが笑うことのできる動物だという事実のほうに心惹かれてこの物語を楽しむのである。

男の子が、転げまわって笑う場面の木々には『もりのなか』よりずっと多く、5つもの耳が男の子の笑う声に耳をすましている。そして、森に向かって歩いていく父と子であるが、男の子は紙の帽子をかぶり、ラッパを持って小さな兵士として歩き、寄り添う父が持つ花輪は、お墓に手向ける花のようにも見える。人間のように笑うことのできない異界の動物たちに、もう笑うことの出来ないあちらの世界に行った兵士たちに花を手向けに行く父子とも読み取ることが出来る場面である。

『もりのなか』と『またもりへ』の間の時期に出版された『海のおばけオーリー』*Oley, the Sea monster*（1947）の赤ちゃんアザラシは、まだ離乳もできていないうちに母親から離れてしまい、水族館でホームシックにかかっていると感じた飼育員によって湖に戻してもらえたものの、“海のお化け” sea monsterと見間違えた人間たちはパニックになるという話である。『海のおばけオーリー』は、離乳以前に母からはぐれ、動物ショップ店員と飼育員によって育てられる。このアザラシは飼育員によって湖に戻して貰え、最後には母アザラシに再会する、つまり仲間のところまでたどりつくというお話であるが、エッツはその前に、人間と仲良くなろうと近づくと、“海のお化け”と勘違いされ、殺されそうになる姿を描く。自分の居るべき場所、家族のもとから徴兵された若い兵士は、ホームシックにかかっても帰ることは出来ない。そして、脱走兵となってしまった場合には、もう民間人に受け入れられることもない。エッツはこの作品の中では、殺されずに、飼育員に助けられ、最後には母に会えた赤ちゃんアザラシを描くが、徴兵された兵士たちの多くは、家族を思いながら死んでいったであろう。ちょうどエッツの最初の夫がそうであったように。

その上、アザラシは檻の中にいる間は、人々が喜んで近くに来てくれたのに、脱走した瞬間から新聞記者によってことさら誇張して報道され、“sea monster、sea monster”と恐れられる。エッツは、新聞報道とそれに踊らされる民衆を揶揄する意味も込める。漫画風な、コミックス仕立てとしたことも、報道と民衆のから騒ぎを増長させる役割を果たしている。

しかし、迷子アザラシは、淡水のミシガン湖から、

同族のいる海へまで帰ることが可能なのであろうか。子どもたちは、アザラシの赤ちゃんの大冒険を楽しむが、エッツは、脱走の罪で、殺されたり、二度と故郷の土を踏めなかったりと、monsterとして疎外されて生きていかなくてはならない若者たちへの哀悼を込めたともいえる。『海のおばけオーリー』は1947年、第二次世界大戦終結の翌々年の出版である。

特に、この時期バージニア・リー・バートンはじめ女性絵本作家による絵本には、自分の状況から逃げ出そうとする若者を描いた作品が見受けられる（1999、村上）。

脱走した若者の中には、『ちいさなふるいじどうしゃ』*Little Old Automobile*（1948）のように、がむしゃらに逃げ、ついにはバラバラになってしまうことも起こったのではないか。ちいさなふるいじどうしゃは、かえるを、うさぎを、あひるを、めんどりを、牛を、そしてお百姓のおばさんまでもはねとばし、暴走した挙句にふみきりでも止まれず、汽車にぶつかってしまう。誰も「どうぞお逃げなさい」とは言ってくれない。脱走兵を待ち構えているのは、行く手を阻む汽車に衝突し、自分をバラバラにされてしまうという現実である。戦場からかろうじて帰宅することのできた兵士であっても、自己のアイデンティティを見失い、心がバラバラになった者も少なくなかったはずである。

何事もなかったかのように、ちいさなふるいじどうしゃの部品が置かれて、登場人物たちが平穏に暮らしていることも、戦争で犠牲となった若者たちへの哀悼と、その犠牲の上に築かれた平和であるとの読みが成立する。

3. 至福の世界と呼ばれる『わたしとあそんで』の危うさ

『もりのなか』（1943）から12年後、第二次世界大戦終結から10年後に出版された『わたしとあそんで』*Play with Me*（1955）は、柔らかな明るい色調の作品となる。エッツは幼い日々を過ごしたなつかしい田園風景の中に女の子を置く。主人公はまだ、就学前と見受けられる女の子で、大きな白いリボンを結んだ髪型をしており、エプロンをまとっている。バッタ、かえる、かめ、りす、かけす、うさぎ、そしてエデンの園にも存在したへびなどの小動物に「あそびましょ」と声をかけ、遊び相手になってほしいと願うが、どの小動物にも逃げられてしまう。女の子が、池の端の石に腰掛け、じっとしていると、動物達が戻り、野生の闖入者、鹿まで登場し、女の子のほっぺをなめてくれる。

矢野智司は、『動物絵本をめぐる冒険 - 動物 - 人間学のレッスン』の中で、“逆擬人化”について論じているが、二足歩行、衣服を着る、言葉を話すという擬人化に対して、人間のほうが動物のほうに近寄っていくのが“逆擬人化”である。（矢野、2002）

孤独をくぐりぬけた後、動物の方に一体化し“逆擬人化”される原初的な感覚をもって動物たちとの触れ合いを体験し、女の子は「とびきりうれしい」と喜びを表現する。背表紙に小さく描かれた女の子の姿は、自然と一体になる恍惚感、至福感を身体全体で感じ取っているかのようである。この至福の体験はC・S・ルイスが兄の箱庭を見て、またビアトリクス・ポター『りすのナトキンのおはなし』[3]を読んで感じた興奮ともいえる“JOY”[4]にも通じ、J・R・R・トールキンが『妖精物語の国へ』[5]の中でファンタジーの最も深遠で崇高な部分として挙げる“幸福の大団円”にも通じるものである。

『わたしとあそんで』については、その暖かさや柔らかさから、至福の体験や喜びの表現としての面が論じられてきた。

上田由美子は、エッツが幼い日、自然に囲まれて、その中で十分一人の時間を持てたことを「幼いころに、そしておそらく大人になってからも、よろこびと感じていたことをエッツは子どもたちのために書きたかったのだと思います。」[6]と、子どもにとっての“ひとり思いめぐらす時間”の大切さを論じる。

但し原初的な快の感覚というのは危うさも含んでいるものである。至福の体験は死（タナトス）の危うさと表裏をなしている（中沢、1997）ともいえるが、エッツが戦争によって失った平和な生活や、そこから生じた危うさの感覚、寂しさはタナトスのへりと接するところまで女の子を連れて行く。至福にあふれた「はらっぱ」は、実は幸せに満ちた「エデンの園の再現」だけでも、囲われた安全な世界だけでもない。

女の子は原っぱで遊び相手を「あそびましょ」と追いかけて見失う。しかしそれ以前に女の子は、保護され安全である家から、一人で離れるのである。原っぱは、手の入れられていない空間であり、蛇の誘惑があり、手前の鉄条網は壊れている。灰島かりが、この壊れた鉄条網を「ここが　人が簡単には立ち寄れないような奥深い場所であること、そして古い時代ともつながっている」[7]ことの表現と読み解いているが、まさにこの鉄条網は、はらっぱという

エデンの園が、もうひとつ奥深い暗闇へと通じていることをフェードアウトした画面から見えるように描かれる。鉄条網はほころびた状態で、くずれたままになり、杭もまた何者かによって踏み砕かれ倒れている。ここを通って原っぱへ侵入した鹿は、小さな赤ちゃん鹿として描かれてはいるが、ゆくゆくは野性となり、人と共存することは出来なくなる。アメリカの児童文学『小鹿物語』[8]大きくなってしまった鹿は主人公の少年ジョディが、手放しても何度も戻ってきてしまうので、鹿はジョディの母によって射殺されるのであるが、『わたしとあそんで』の鹿も女の子が大きくなったときには、別離が待っている野性の動物である。それでも子ども時代には鹿の赤ちゃんとの交流は至福のとき、“JOY”（C・S・ルイス、1955）[9]であり、“幸せの大団円”（J・R・R トールキン、1964）[10]を迎えるために必要なことでもあった。そのために壊れた柵はどうしても描き込まれなくてはならないものであった。

図3. Marie Hall Ets *Play with Me*:アメリカペーパーバック, 1955

図4. マリー・ホール・エッツ：わたしとあそんで．よだじゅんいち訳, 福音館書店, 26-27, 1968

鹿に舐められるという動物との交流、つまり人間の方が動物化される“逆擬人化”はこのくずれた鉄条網という垣根を越えて原っぱへ入り込んでいるのである。『わたしとあそんで』の女の子はまだ、なめられる段階ではあるが、その次の段階は「そーっと噛まれる」ところに行きかねない。エデンの園を守っていた柵が壊れ、タナトスの欲動が流れ込みはじめるその境界、意識のへりであり、戦場へと続いている。エッツは戦争の影、生きることの不安を暗示しながらも、自分自身の幼い頃の至福の時間を子ども達に届けようとする。

子どもが孤独でいる時間[11]は、暖かく見守るおひさまや、背後に見える家の中から出ては来ないが戻れば必ずそこにいる母、『ピーターラビットのおはなし』[12]の駒鳥同様、全知の視点を持ち、『モーモーまきばのおきゃくさま』にも登場するカケスなどによって守られている

この幼い頃の自然の抱かれた幸せな時間が、その後の人生のどれほど辛い試練の時を迎えようとも自分を支え続けてくれることをエッツは絵本に織り込んでいるのである。表紙の女の子は、グリムの「かえるの王様」の昔話の主人公のように、かえるを追いかける。エッツの作品は「かえるの王さま」「ハメルンの笛吹き」「エデンの園」といった昔話、伝説、神話世界ともつながっている。エッツは、メキシコのクリスマス習慣、異文化を紹介した『クリスマスまであと 9 日』[13]で、コールデコット賞を受賞している。

4.『きこえる　きこえる』に見られる意志の疎通手段

ベトナム戦争が始まった 1964 年、そして米国が介入したのが 1965 年である。その 1965 年、エッツは 59 歳で『きこえる　きこえる』[14]を出版する。『きこえる　きこえる』は、ことば以外の手段での意思の疎通を、28 の様々な形で表している絵本であるが、決して積極的な意思の疎通だけを描いているのではない。28 項目のうち半分の 14 項目は、「頂戴」「おいで」「大好き」「花の匂いを嗅ぐ」「鳥の声を聴く」などであるが、残りの 14 項目は、「喧嘩」「嫌い」「聞きたくない」「わからない」など消極的コミュニケーション表現となっている。2 つの大きな世界大戦、そのさなかに 2 人の大切なパートナーを失ったエッツは、世界はいつも積極的なコミュニケーションだけで成り立っているとは限らないことを、絵本の形で子ども達に示したのであった。

島多代は、1960 年代、子育て期間を米国ニューヨークで過ごし、絵本の創り手も、渡し手も、戦争の影響を色濃く受けながらもなお、子どもにどんな本を与えたらよいかを考えていたと 2010 年の国際子ども図書館シンポジウムの中熱く語った。1920 年代 30 年代の絵本の幕開け、1940 年代

50 年代の黄金期と呼ばれる時代の絵本がいかに幾多の戦争を経るという歴史的社会的状況の中で、丁寧に、また祈りを込め、絵本を託していったのである。

本稿では、マリー・ホール・エッツの作品は、あたたかく柔らかく喜びにあふれているだけではなく、哀しみや不安も潜んでいることを論じた。そこには戦争や失った人々への哀悼の片鱗が見られ、だからこそ、寂しさをも抱える子どもたちに寄り添える作品としての方向性を探ることが可能といえるだろう。愛らしい絵本、暖かい絵本として受容され、愛読されてきた作品が、人の心の奥の孤独にも寄り添える部分を内包していることを検証する手立てを今後も模索していきたい。

引用文献

1. 矢野智司：動物絵本をめぐる冒険－動物－人間学のレッスン . 勁草書房 , 東京：204, 2002
2. 松居　直:絵本とは何か . 日本エディタースクール出版部 , 東京：307. 1973
3. ビアトリクス・ポター：りすのナトキンのおはなし . 石井桃子訳 , 福音館書店 , 東京：1971（London, 1903）
4. C・S・ルイス：喜びのおとずれ－ C・S・ルイス自叙伝 , 早乙女忠訳 , 冨山房 , 東京 , 1977
5. J・R・R・トールキン：妖精物語の国へ , ちくま文庫 , 筑摩書房 , 東京：125, 2003
6. 上田由美子：子どもと絵本のであうとき　第 8 回ひとりですごすよろこびの時間 , 月刊こどものとも 2010 年 11 月号（通巻 656 号）折り込み: p. 3, 2011
7. 灰島かり：マリー・ホール・エッツの描いた , 男の子の冒険と女の子の冒険絵本評論ネバーランドてらいんく , Vol. 2：212-219, 2005
8. マージョリー・キナン・ローリングズ：鹿と少年（上･下）, 土屋京子訳 , 光文社古典新訳文庫：2012. *The Yearling*, 1938
9. C・S・ルイス：喜びのおとずれ－ C・S・ルイス自叙伝 , 冨山房 , 東京：1977
10. J・R・R・トールキン：妖精物語の国へ . 杉山洋子訳 , ちくま文庫 , 筑摩書房 , 東京： 125, 2003
11. エリーズ ボールディング：子どもが孤独でいる時間 . 松岡享子訳 , 1988
12. ビアトリクス・ポター：ピーターラビットのおはなし , 石井桃子訳 , 福音館書店 , 東京 , 1971（London, 1901）
13. マリー・ホール・エッツ：セシのポサダの日 . 田辺五十鈴訳 , 冨山房：1974. クリスマスまであと 9 日－セシのポサダの日－ . と改題 . A Nine Days to Christmas1959
14. マリー・ホール・エッツ：きこえる　きこえる . 舟崎靖子訳 , らくだ出版：1981. Talking Without Words：I Can, Can You?, 1968.

参考文献

・村上百合子：アメリカの絵本出版に関わった女性たち . 女性史・女性学ノート第 7 号 , 女性史・女性学の会編 , 東京 , 1999
・島　多代：絵本の黄金時代は日本に何をもたらしたのか。シンポジウム , 絵本の黄金時代 1920-30 年代アメリカとソビエトを中心に , 国際子ども図書館 , 国立国会図書館・国際子ども図書館シンポジウム , 東京 , 2010, 11, 27
・中沢新一：ポケットの中の野生 . 岩波書店 , 東京 , 1997
・斉藤次郎：行きて帰りし物語－キーワードで解く絵本･児童文学. 日本エディタースクール出版部 , 東京 , 2006
・矢野智司：自己変容という物語－生成･贈与･教育 . 金子書房 , 東京 , 2000
・Twentieth-Century Children's Writers 3rd ed。St James Press, 1989
・The Horn Book, No.212 May Massee Newbery and Caldecott Medal Books
・May Massee：‘Biographical note Marie Hall Ets’ The Horn Book Inc.212 Newbery and Caldecott Medal Books, 1956-1965, New York ,
・The May Massee Collection Creative Publishing 1923-1963 A Checklist Ed. George V. Hodowanec 1979 Director William Allen White Library Emporia State Univ.
・Books in Print 1971 R. R. BowkerCompany（N. Y. &London）An author-title-Series index to The Publishers’ Trade List Annual.
・Childrens’ Catalog, FourteenthEdition, TheH。W。WilsonCompany,（N. Y. ）U. S. A. 1981
・Childrens’ Catalog, Eighteenth Edition, The H。W。Wilson Company,（N. Y.）U. S. A. 2001
・倉沢栄一：アザラシの棲む岬から . 平河出版社 , 東京 1993

Marie Hall Ets 著作一覧（米国での出版社 , The Viking Press, New York）

出版年	原題	邦訳年	邦訳　題	訳者	出版社
1935	*Mister Penny*	1997	『ペニイさん』	松岡享子	徳間書店
1939	*The Story of a Baby*	1982	『赤ちゃんのはなし』	坪井郁美	福音館書店
1944	*In The Forest*	1963	『もりのなか』	間崎ルリ子	福音館書店
1946	*Linty*				
1947	*Ory, The Sea Monster*	1974	『海のおばけオーリー』	石井桃子	岩波書店
1948	*Little Old Automobile*	1976	『ちいさなふるいじどうしゃ』	田辺五十鈴	冨山房
1951	*Mr, T. W. Anthony Woo*	1983	『ねずみのウーくん』	田辺五十鈴	冨山房
1953	*Another Day*	1969	『また　もりへ』	間崎ルリ子	福音館書店
1955	*Play with Me*	1968	『わたしとあそんで』	与田準一	福音館書店
1956	*Mister Penny's Race Horse*	1998	『ペニイさんと動物家族』	松岡享子	徳間書店
1958	*Cow's Party*	1978	『モーモーまきばのおきゃくさま』	山内清子	偕成社
1961	*Mister Penny's Circus*				
1963	*Gilberto and the Wind*	1975	『ジルベルトとかぜ』	田辺五十鈴	冨山房
1965	*Just Me*	1981	『あるあさぼくは』	間崎ルリ子	ペンギン社
1967	*Bad Boy*、*Good Boy*				
1968	*Talking Without Words ; I Can*、*Can You?*	1981	『きこえる　きこえる』	舟崎靖子	らくだ出版
1970	*Rosa –The Life of an Italian Immigrant*				
1972	*Elephant in a Wall*	1978	『いどにおちたぞうさん』	田辺五十鈴	冨山房

Marie Hall Ets と戦争および著作

1895	0		1895 ～ 1898	第2次キューバ独立戦争
1905	10		1905	ロシア第1革命
1910	15		1910	メキシコ革命
1914	19		1914 ～ 1918	第一次世界大戦
1915	20		1915	チェコスロバキア独立宣言
1917	22	大学を中退、絵の仕事を始める。Milton Rodigと結婚するも、結婚直後に夫、戦死。	1917	アメリカも第一次世界大戦参戦（4月ドイツに、12月オーストリアに宣戦布告） ロシア2月革命
1918	23		1918	第一次大戦終結
1919	24	シカゴのセツルメントでソーシャルワーカーとして働き始める	1919	
1926	31	チェコ、ピルゼン小児医療所勤務・医療事故により病身となる	1926	
1932	37	Ets博士と再婚	1932	
1935	40	『ペニーさん』	1935	
1939	44	『赤ちゃんのはなし』	1939 ～ 1945	第二次世界大戦
1943	48	Ets博士　亡くなる	1943	
1944	48	『もりのなか』	1944	
			1945	第二次世界大戦終結

1947	52	『海のおばけ　オーリー』	1947	
1950	55		1950	朝鮮戦争
1953	57	『また　もりへ』	1953	
1955 1956	59 60	『わたしとあそんで』 『ペニーさんと動物家族』	1955 1956	
1957	61	コールデコット賞受賞『 クリスマスまであと九日』によって	1957	
1958	62	『モーモーまきばのおきゃくさま』	1958	
1960			1960 ～ 1975	ベトナム戦争
1961	64	『ペニーさんのサーカス』(邦訳なし)	1961	
1963	66	『ジルベルトとかぜ』	1963	
1965	70	『あるあさ　ぼくは』	1965	ドミニカ侵攻
1968	73	『きこえる　きこえる』	1968	
1970	75		1970	カンボジア侵攻
1971	76		1971	ラオス侵攻
1982	87		1982	レバノン派兵
1983	88		1983	グレナダ(英植民地)侵攻
1984	89	亡くなる	1984	

本論は、2011年7月クイーンズランド工科大学 Queensland University of Technology,(Australia Queensland)で行われた第20回国際児童文学学会 The 20th Biennial Congress of IRSCL (International Research Society for Children's Literature)、での口頭発表(Virtual)のFears in Marie Hall Etz and Virginia Lee Burton's picture books by Yoko Kanbe and Hiroe Suzuki の神戸洋子発表部分を基に構成したものである。